

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	Paul Friedrich: "On Aspect Theory and Homeric Aspect," in International Journal of American Linguistics Memoir 28 (1974), P.P.1-44
Author(s)	酒見, 紀成
Citation	ニダバ, 7 : 24 - 30
Issue Date	1978-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050982
Right	
Relation	



Paul Friedrich: "On Aspect Theory and Homeric Aspect," in International Journal of American Linguistics Memoir 28 (1974), P.P. 1—44

酒 見 紀 成

著者の意図するところは、要するに、ホメーロスのギリシア語におけるアスペクトの構造を「有標識性」(markedness)という観点から解明し、それをロシア語やアメリカインディアン語など他の諸言語のアスペクト体系と比較・対照しながら、一般言語理論のなかのアスペクト論を構築することにある。

著者は意味の側からアスペクトに接近する。従って、動詞の語幹のみならず、動詞の語根、動詞+副詞(あるいは前置詞句など)もアスペクトを表わすことになる(それぞれ語幹アスペクト、語彙アスペクト、統合的アスペクトと呼ばれる)。この論文ではとくに語幹アスペクトに焦点が合わされており、ホメーロスの三種類のアスペクト語幹——継続語幹、アオリスト語幹および完了語幹——のもつ多くの意味的下位範疇が問題にされる。

※

ところで本題に入る前に、あまりなじみのない有標識性なる概念について予備知識を得ておこう。これは、Bernard Comrie (Aspect, London, 1976)によれば、二つあるいはそれ以上の項目間の対立(例えば継続語幹 vs. アオリスト語幹)において、どの項目が他の項目より「より普通で、より一般的で、より特殊でない」と感じられるか、ということであり、そのように感じられる項目は無標識的、他の項目は有標識的であるとされる。そして、直観にばかり頼らなくてもいいように、種々の性質の基準が考案されている。

- ① 意味論的基準、これは最も決定的なものの一つで、多くの場合、無標識的な範疇の意味が有標識的な範疇の意味を包含する、従って、無標識的な範疇は有標識的な範疇が期待されるところでさえも常に用いられ得る、というものである。これは無標識的な範疇の方がより多くの意味的下位範疇をもつということを意味する。
- ② 形態論的基準、これには三つある。
 - a. 有標識的な範疇は無標識的な範疇に比べて余分の形態をとる。例えば英語の進行形と完了形、イタリア語やスペイン語の進行形、それに接頭辞のmi-をとるペルシア語の未完了相など。
 - b. 無標識的な範疇の方が形態的に不規則である。
 - c. 有標識的な範疇では、無標識的な範疇で区別されている形態の融合がよく生じたり、また、

ある形態が有標識的な範疇の語形変化表から単に抜けていることがある。例えば、有標識的なイタリア語の進行形には未来時制が欠けている。

③ 中和に関するもので、ある動詞がその意味の故にあるいは他の理由から、他の動詞が二つあるいはそれ以上のアスペクトの形態を持つところで、一つのアスペクトの形態しか持たない場合には、その動詞の形態は無標識的な範疇のそれを反映しているとみなすことができる。それは有標識的なアスペクトの形態をとった動詞がアスペクトに無関係に用いられているとは考えられないからである。

④ 頻度、例えばイタリア語やスペイン語の進行形は英語の進行形に比べて使用頻度が明らかに低いので、それらを有標識的だとみなすことができる。

以上が主なものであるが、いくつかの基準の間に矛盾が生じた場合には、それぞれの基準にどのような重きを置くか決定しなければならない。また、有標識性は、もう明らかなように、「いっさいか無かの選択」ではない。

※

本筋に戻ろう。まず著者は母音交替によるアスペクト語幹の対立（例えば、λείπω: (έ) λιπον: λέλοιπα）を重視する。それはシグマのアオリストやカッパによる完了形が継続語幹からつくられるからであり、また、シグマのアオリストが比較的新しい時代に発達したもので、印欧基語における形態論的型の特徴としては微々たるものであったという通時的事実をも考慮したからであろう。接続法アオリストから発達した未来は、それが継続語幹をもつので、未完一現在の系列に位置づけられる（ストア学派の学者はこれをアオリストと共にまとめていた）。そこでアスペクトとテンス — これは「相対的アスペクト」とみなされ得る — の体系は次のようになる。

Anterior	Primary Theme	Posterior
imperfect	"present"	("future")
pluperfect	perfect	future perfect
	aoiist	

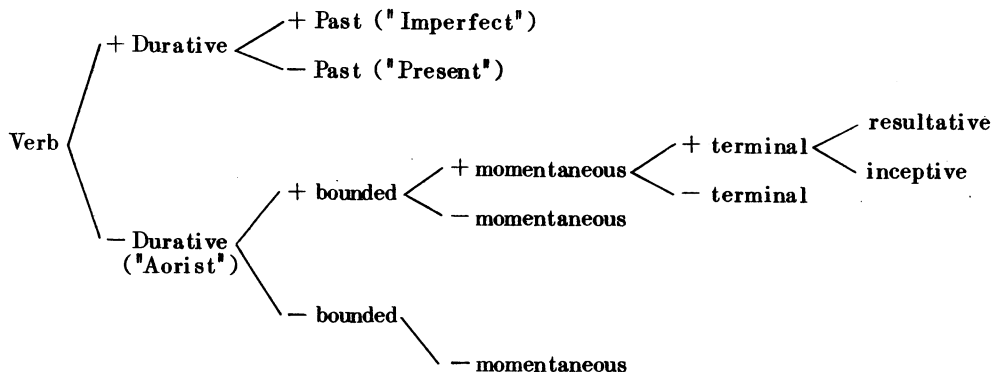
しかしながら著者が実際に問題にするのは、未来と未来完了とを除いた他の五つの範疇である。それは未来完了には能動態が欠けており、またその用例もきわめて少数だからである。そもそも著者はホメロスの未来をテンスとしてではなくむしろムードとみなしている。例えば έάσομεν なる形は直説法未来とも短母音の接続法アオリストともとることができる。つまり未来はアスペクトに関与しないのである。

ここからが著者の議論の中核である。三種類のアスペクト語幹のうちで継続語幹が第一位の次元であり、主要な対立は継続語幹とアオリスト語幹の間にあるとして、まず現在語幹とアオリスト語幹とを有標識性について比較すると、形態論的基準に関しては、アオリスト語幹の方がいくつかの理由でやや無

標識的である、と言う。第一に、アオリストには子音式(σ-アオリスト)、幹母音式(第二アオリスト)および無幹母音式の三種類の語幹があるが、継続語幹は幹母音式と無幹母音式だけである。第二に、第二アオリストの語根の母音はゼロ階梯であり、アオリスト不定形と分詞は語根ではなく語尾にアクセントを置かれる。第三に、動詞のむきだしの語根はアオリスト語幹において最もよく見いだされる。最後に、アオリスト語幹には、先の図からもわかるように、過去や未来を表現する二次的語幹が存在せず、「体系的孤立」を示している。

ところで、最後の理由は、Comrie に従えば、反対に、アオリスト語幹を有標識的とする理由になるはずであるが、これについてはまた後で触れる。

では、"semosyntactic" な基準についてはどうであろうか。ここでもアオリスト語幹の方が無標識的である、とされる。テンスに関しては両語幹とも過去、現在、未来(完了)および時に関して限定されない不定の意味と共に生じるので、ほぼ等価である(アオリスト形が過去の出来事に言及することが多いのは、アオリスト語幹ではなく加音と人称語尾のためであり、それが現在や未来の意味と共に用いられたとしても、不思議なことではない。アオリスト不定形はよく未来に言及する。ただし、「事実と反する構文」では必然的に過去に言及する。そもそもテンスが区別されるのは直説法においてだけであり、他の法では中和され、特に命令法でアスペクトが浮き彫りになる。しかし、アスペクトに関しては、アオリスト語幹の方が幾分多様であり、より多くの意味的下位範疇と文脈による機能の変わりやすさを持っている。すなわち、現在語幹は大体継続という特徴で説明できるけれども、アオリスト語幹は、学者によって、瞬間性(momentaneity)や完了や全体性など様々な特徴が立てられており、満足のいく統一の意味はいまだかつて与えられたことがないのである。このことがアオリストを無標識的だとする一つの理由となる。今、アオリストの意味的下位範疇の間の構造的相互関係を「差異的有標識性の枝分かれ図」で示してみよう。



アオリストの機能的な下位範疇は、ある時間を要した、従って開始と終結の境界をもつ出来事を報告する用法か、それとも単に「来る」、「する」のように動詞の意味そのものだけを表わす、いわゆる "pure process" の用法かで、限定的と非限定的とに分かれる。そして、前者は、ある時点での瞬間的な行

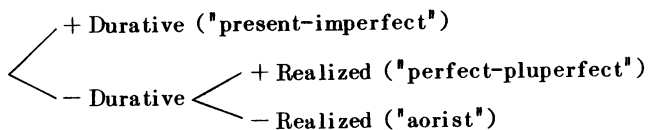
為とみなされるか、それとも *ἔτη τριάκοντα ἔκησε* 「30年間彼は(アテーナイに)住んだ」のような用法かで、瞬間的と非瞬間的とに分かれる。さらに前者は、特に継続せる動作や状態を示す動詞において、その動作状態の開始(例えば *ἔδάκρυσα* 「わっと泣き出した」)や終結(*ἔλαχον* 「獲得した」)を表わすアオリストか否かで、末端的と非末端的とに下位区分される。

しかし、現在語幹とアオリスト語幹は有標識性の程度において異なるだけであり、しかもその程度は大きいものではなく、実際微妙な場合が多い。従って、両者は「ほぼ等価である」と言う。

次にアオリストと未完了(Imperfect)とを比較すると、両者とも直喩で用いられ、反復を表わす *-sk* をつけることができ、共に「過去完了」の意味を帯びる。また同じ過程に言及する一連の動詞において交替する。このような箇所では両者は「ほとんど等位的」であり、その選択は主としてアスペクト、そして多少は韻律や文体の要因によって決定される。問題はそれらの相対的有標識性であるが、形態論的には、未完了は現在語幹から派生的につくられるのであるから、アオリストよりも規則的である。意味論的にも未完了の方が文脈によってその意味が変わることが少なく、また意味の下位範疇も少ない(未完了は厳密に格言的な文脈では生じない)。従って、未完了はアオリストよりも有標識的である。

こうしてアオリスト語幹が現在-未完了、すなわち継続語幹よりも無標識的であるという結論を引き出す。

残る問題は完了語幹のアスペクト体系における位置づけである。完了はある動作が実現した結果生じた状態(通例現在の状態)を表わすのであるから、「完了」よりも「結果」という術語の方がいっそう適切であり、この「アスペクト」は「継続」や「完了」といった基本的アスペクトとは意味論的に全く異なっている。完了形は、アオリストと異なり、ある出来事が過去に完了したことを必然的に合意する。さらにホメーロスの完了の大部分と第二完了のすべては自動詞であり、このような自動詞的な完了だけが真に静態的である。すなわち、いわゆる「完了」には、テンス(過去)、真のアスペクト(完了)、準アスペクト(状態)そして態(自動詞性)などの特徴がからまり合っているのである。このような完了を著者は、それが中世ギリシア語でアオリストと融合したという通時的事実 — 残念ながら筆者はこの事実をまだ確認していないが、著者は並行例として、ラテン語の完了が印欧語の完了とアオリストとを結合した事実を挙げている — によってアオリストと共に分類し、これらは継続語幹と対立すると考える。これを図示すると次のようになる。



こうして著者は継続性を「現在語幹の一つの重要な機能」にすぎないとする考え(Kuryłowicz)や、ホメーロスのアオリストをスラヴ語の完了相の如く扱って、完了がアスペクトの基本的特徴であるとする説を否定し、継続性/非継続性こそホメーロスのアスペクト体系の主要な対立であるとし、これを支

持するものとして、継続語幹が除々に失いつつあった本来の継続の意味を回復するために、重複による現在形や一σκで形成される反復形(iteratives)のような派生的形態が拡充せられた過程を指摘する。そして、このような継続の意味の回復は古代ギリシア語だけでなく他の印欧諸語でも見いだされるので、継続性の、基本的アスペクトにおける示差的特徴としての地位は印欧基語にまでさかのぼらせることができよう、と言う。著者の主張の第二点は、すでに述べたように、継続性がこの対立の有標識的な項であるということであり、その理由を次のようにまとめている。

- ① 他の多くの言語(英語, スペイン語, イタリア語など)で継続性が明らかに有標識的な項である。
- ② 継続語幹はホメーロスでは直説法以外の法でアオリスト語幹ほど頻繁に生じない。
- ③ 継続語幹はアオリスト語幹の主要な二つの用法, すなわち限定的アオリストと非限定的・無時間的アオリストとのいわば中間的位置を占めており, このことを, 後にアッティカ・ギリシア語でアオリストが物語体のより一般的な形式となったという通時の事実が確証する。
- ④ アオリストの総体的な定義は未決定のままであり, おそらく非継続性の組(アオリストと「完了」)全体を特徴づけることは不可能であろう。

※

ホメーロスのギリシア語とスラヴ語のアスペクト体系はよく混同されてきたが, スラヴ語のそれは完了/ 不完了の対立によって特徴づけられ, ギリシア語の完了に当たる範疇は欠けており, その特徴と機能は完了相と不完了相との間に様々に分布する。印欧基語の(後期の) 状態を最もよく反映するのは, ホメーロスの有標識的な継続性であり, スラヴ語の完了/ 不完了の体系(もちろん資料的におよそ二千年時代が下る) よりもよく反映する, と言う。また著者は Kartsevsky と共に従来の説に反対し, ロシア語の不完了相を有標識的な項であるとみなしている。

次に, アメリカインディアン諸語をみると, Yokuts 語と Iroquoian 語でホメーロスのアスペクト体系と類似のものが認められ, そこから著者は, 我々がアスペクトと呼ぶ基本的な抽象的特徴は時の次元における点と線の対立の表現にかかわるもので(すなわち完了/ 不完了や継続/ 非継続であり), これと, やはりかなり普遍的な第三の対立, 静態的/ 非静態的が通常組み合わせられて, 次の三つの基本的アスペクト範疇が得られると言う。

- (1) durative, continuative など。
- (2) punctual, completive, aorist, perfective など。
- (3) stative, perfect, usitative など。

そして, このうちで(1)の継続相(あるいは不完了相, 未完了相など)の有標識性は言語的普遍性であるといったアスペクトの普遍性(universals)に関する公理(axiom)を立てようとしている。

最後に, アスペクトは, ある動作が発話時に関して先であるか, 後であるかによって決定されるテンスと異なり, 動作や状態自体に固有な時間的価値を符号化(code)する, 換言すれば, 語られる出来事それ自体を, その参加者にかかり合ったり, 発話行為に言及することなしに特徴づける(テンスは「転

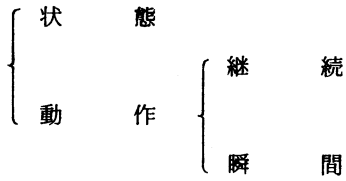
換子 (shifter) 」であり、アスペクトは「非転換子」である) ので、アスペクトが語られる事象やその参加者を強調する機能を有するという説 (Mutzbauer や Kartsevsky) に著者は懐疑的である。

※

以上が論文の概略であるが、ホメーロスのアスペクト構造の分析について二つのことが指摘できると思う。一つは、継続語幹対アオリスト語幹の主要な対立において、はたしていずれか一方を他方より有標識的 (marked) だとすることができるのであろうかということである。アオリスト語幹対現在語幹においてはほとんど等価であり、アオリスト対未完了においてアオリストの方がやや無標識的であるにすぎない。それをアオリスト語幹は継続語幹よりも無標識的であると結論するのは、主として、アオリスト語幹の多義性の故である。すなわち、アオリスト語幹の意味が限定的と無時間的の二つの方向へ分かれていくのに対し、継続語幹はその中間に位置すると考えるからである。しかしそれは現在語幹が格言的アオリストと同様に、一般的意味と共に、例えば比喩や格言において生じるという事実を無視している。なるほど未完了には無時間的な用法はないかもしれない。しかし、未完了は現在語幹の二次的語幹から作られるので、主要語幹であるアオリスト語幹とは同じ関係に立たないはずである。従って、現在語幹に関する事実を捨てて、未完了のそれをとることは問題があろう。また、アオリスト語幹の多義性は、著者がアスペクトを客観的に扱っていることの反映であり、ある動作を主体がいかにかに眺め、いかにかに表現するかという主観的な面では、アオリスト語幹も継続語幹と同様に積極的な価値を持っているはずである。筆者が先にその基準を引用した Comrie は、「意味論的な基準を古代ギリシア語のアオリスト対未完了、スペイン語の単純過去対未完了のような対立に適用することには問題がある。なぜならアオリストを未完了と置き換えること、またその逆は普通全く違った意味を持つからだ」と言っている。

一般に多くの言語で過去時制に関しては完了的アスペクトが無標識的となり、現在時制に関しては未完了的アスペクトが無標識的となる傾向があり、これは古代ギリシア語にも当てはまる。このことについて Comrie は、仮にロマン諸語や古代ギリシアのような言語においてアオリストが未完了に対して無標識的であるという説を受け入れたとしても、それを他のテンス (現在) へ広げることはできず、さらにアオリスト分詞・不定詞を現在分詞・不定詞に対して無標識的だとする必要もない、と言う。この意見に従えば、アオリスト語幹は継続語幹に対して無標識的であると一般化して言うことはできなくなる。アオリスト語幹の方が継続語幹に比べ使用頻度が圧倒的に高いわけでもないので、Friedrich のように一般化するのではなく、ある状況では一方の項が無標識的であり、他の状況では他の項が無標識的となる、と言う方が自然なように筆者には感じられる。

二番目の問題点は、意味論的に全く異なる完了語幹をアオリスト語幹と一緒にまとめていることで、これには、中世ギリシア語における両語幹の融合という通時的理由以外に、もっと根拠が必要であろう。なぜなら純粋に意味論的に言えば、日本語の動詞分類におけるように、次のように分析することも可能だからである。



最後に、継続性の有標識性は言語的普遍性であるという主張は仮説の域を出るものではないと言わねばならない。

しかしながら、古代ギリシア語の三通りのアスペクト語幹の間の相互関係を類型論的な立場から解明しようとしている点で、この論文は参考になると思われる。